

## 教会の設立&エピソード

本井康博

### 「西京」に3つの「公会」

トリ（4番手）の発表者として、1876年の最後を飾る出来事である教会の設立について、お話しします。

当時の京都は教会皆無の時代です。しかも、全国的にも church の訳語が「教会」ではなく、「公会」と呼ばれていた時代です。その京都にこの年の年末、立て続けに3つの公会ができました。西京第一公会、同第二公会、同第三公会です。

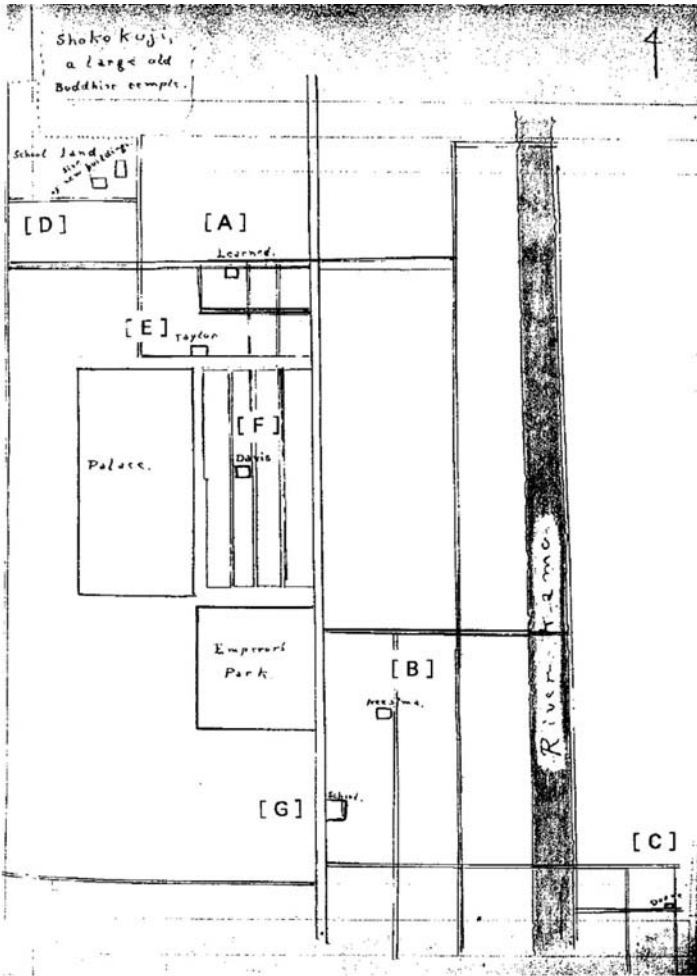
不思議ですね、ゼロからのスタートなのに、出来るとなるといっぺんに3つです。

明治維新後の京都市民は、京都よりも「西京」という地名を愛用していました。維新後に天皇が東京に転出したこと、千年の都は地方都市に堕ちてしまいました。

この結果、東京に事実上、遷都されてしまったことに対抗する意味から、市民たちは自らの街を「東京」に対して「西の都」（西京）と呼称するようになりました。

新島襄なども関東人でありながら、手紙などではもっぱら「西京 同志社」なる表記を使っています。教会名にしても、正式名は「京都第□公会」だったでしょうね。

それはともかく、以上の3つの公会は、京都で最初に生れたプロテスタント教会です。それぞれが新島（宣教師でした）を含めてアメリカン・ボード宣教師（会衆派）の借家で生まれました。第一公会がD・W・ラーネッド家、第二が新島家、そして第三がE・T・ドーン家です。



[A] D・W・ラーネッド邸（西京第一公会）、[B] 新島襄邸（西京第二公会）、[C] E・T・ドーン邸（西京第三公会）、[D] 同志社英学校今出川キャンパス（1876年）、[E] W・テイラー邸、[F] J・D・デイヴィス邸（のちに同志社女学校舎）、[G] 中井屋敷（同志社英学校最初の校舎、1875年）

ラーネッドが描いた同志社の周辺図（1876年6月15日）

『京都のキリスト教 同志社教会の19世紀』（本井康博著、1998年4月）p.91  
 （原図は同志社大学図書館所蔵マイクロフィルム PAPERS OF THE AMERICAN BOARD OF COMMISSIONERS FOR FOREIGN MISSIONS Reel 332）

誕生したのは11月26日、12月3日、12月10日と1週間おきで、いずれも日曜です。

場所も大事です。ラーネッド手描きの市内地図で確認しておきます。大変に貴重な資料ですから、以前に『同志社教会創立120年記念誌』（p.12、日本キリスト教団同志社教会、1996年）と拙著『京都のキリスト教』（p.91、同前、1998年）の両方に入れておきました。

その時にもキャプションとして書いたのですが、3つの教会は地名で区別する場合は、それぞれ「今出川公会」（現京都御苑内で、今出川口近く）、「新鳥丸公会」（現府立鴨沂高校東南角あたり）、「東竹屋町公会」（現京大熊野寮あたりか）と自称します。

新島家が今の「新鳥旧邸」（寺町通松蔭町）ではなく、それ以前の最初の借家（新鳥丸通り）であったことに注意してください。

## 教会の創立と熊本バンド

じゃ、なぜ教会は1875年には生れなかったのか。謎ですよ。答えは人材（宣教師スタッフ）が揃わなかったため、ならびに熊本バンド入学以前ですから、学生信徒の数が限定されていたため、です。

熊本バンドのメンバーは、熊本洋学校唯一人の教員であったL・L・ジェーンズのもとで、信仰的に鍛えられた学生たちが多かったために、京都に移ってからは、（神戸、大阪、三田に次いで）京都でも教会形成の機運が、がぜん盛り上がりました。

こうして、同志社系（会衆派、後の組合教会）の教会としては関西で（ということは日本で、と言うことですが）4番目から6番目の教会が、この年末に京都でたて続けに誕生いたしました。

設立後も、バンド勢力は教会には不可欠のパワーになります。彼ら抜きでは、教会は回りませんでした。第一公会の場合は、市原盛宏、宮川経輝がラーネッドやA・J・スタークウェザーを助けます。第二の場合は金森通倫が新島牧師を、そして第三では海老名弾正や森田久萬人が本間重慶（彼は「神戸バンド」です）と共にドーン宣教師を支えます。

彼ら神学生は伝道師のような働きをして宣教師を助けました。今風に言う

と、神学部に入ったばかりの1回生が、信徒というだけで日曜は伝道師として活動することが期待されたようなものです。

新島などは、「アメリカの父」A・ハーディーに対して、学校ばかりか「当地伝道の未来も明るいです。伝道はほとんど学生たちの手で行なわれています」と知らせているほどです（『新島襄全集』6、p.176、原英文を私訳、同朋舎出版、1985年）。

### 「同志社の教会」が誕生

ここで、いっぺんになぜ3つも、と疑問に思う方、いらっしゃると思います。信徒の人数が限られていたことを考えますと、ひとつで十分です。

現に、3つの教会の会員は、設立当日に受洗した新入会員を含めても、3つ合わせてたかだか60人ほどに過ぎません。だから、市内中心部に大きな教会をひとつ建てるという案も、最初からありました。それだけにこれまた謎です。

3つに分かれた理由は、伝道上、拠点を市内に分散したほうが有利との判断が最終的になされたからです。p.49 地図をもう一回見てください。3つの教会は、うまくバラけています。

最北のラーネッド家と最南のドーン家、そして中間の新島家といった布陣です。中間地帯にはそれ以前から伝道を開始していたJ・D・デイヴィス家もありますが、同家には教会は創られていません。なぜか。

おそらく、教会ができる前月から女子塾（ミッションが創設した京都ホーム）がすでに始動していたからでしょうね。教会が出来てからは、デイヴィス家に居住する女生徒やスタークウェザーは、日曜には近くのラーネッド家（第一公会）で礼拝を守るようになったと考えられます。

以上の3つの教会は、場所こそ違ってはいますが、実は「同志社の教会」の分派みたいなもので、実質的にはひとつです。

その証拠に同志社の女生徒は、女学校に近い第一に、そして男子生徒は校長でもある新島の自宅で開かれた第二に集中します。彼女や彼らは、教会が正式に組織される前から、ラーネッド家や新島家での集会に参加していたはずですよ。第三は、一部の学生が主として市民向けの伝道に従事したもの

と考えられます。

したがって、これら3つの教会間では、戦略的にメンバー相互の異動が必要に応じて行なわれています。

## 学校と教会が初めて両者併行

それから10年たって、3つに分かれていた「同志社の教会」は、最終的には2つに再編成されます。こうして新たに組織されたのが、一般市民信徒主体の平安教会と同志社スタッフ・学生主体の同志社教会です。

再編成後、前者が街中で「街の教会」路線をキープするのに対し、後者は同志社公会堂（今の同志社チャペル）の竣工（1886年）を契機に、キャンパス内に拠点を移し、自ら「学園教会」（college church）に特化します。

だから現在は、小崎先生は平安教会、私は同志社教会と、それぞれ別の教会に属していますが、創立期にはもともと同じというか、ひとつの教会だったことになります。

それはともかく校内に学園教会が生れたことで、新島の教育モットーがようやく現実味を帯びることになります。「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」が新島の「<sup>の</sup>畢生之目的」であること（『新島襄全集』4、p.246、1989年）、これは皆さまよくご存じですよ。

つまりは、日本を良くするには学校だけではダメなんです。教会も必要です。二つの翼が揃って、初めて同志社は日本の近代化のために高く飛翔できるという信念を新島は固く信じていました。

だから、学園教会の母胎とも言うべき「同志社の教会」が誕生した時点で、新島はようやくかねての宿志を実現する糸口をつかんだことになります。

## 1875年に無くて、1876年に有るもの

以上で教会創立の話しを終えて、続いてシンポジウムの「締め」に入ります。1876年の動向に関するこれまでの4つの個別発表をお聴きになって、いままであまり関心が払われてこなかった1876年の持つ独自性が、お分かりいただけたでしょうか。

つぎに最後の報告者として、個別に発表された4つの発表を総括というか一本化、あるいは連結するために、発表と発表の間のスキマを埋めて繋げたり、それぞれの周辺情報を補強するなりして、総合的なグランドデザインを目指してみたいと思います。

そこで、まず問うべきは、「1875年に無くて1876年に有るものは何か」です。

その答えは、同志社のパーツが揃ったことです。男子校、女学校、そして教会といういわば「三つ揃い」とでも言うべき骨格が、ひとまず組み立てられました。ただ問題は、すでに前年に生れている男子校です。この疑問にはラーネッドの見解が参考になります。

彼は1875年に寺町の中井屋敷で誕生した英学校は、とりあえず間に合わせの貧弱な施設のうえ、借家ゆえに仮開校に過ぎない、それに中身にしても、とても学校とは言えないような酷い状態だったと言います。

それに対して学校が自前の旧薩摩藩邸跡地に移転して、自前の校舎を建てた1876年こそ、「同志社のほんたうのはじめ」、すなわち本開校だ、と断言しています。つまりは、同志社の「創立は明治八〔1875〕年十一月二十九日としてあるが、実際、名実共に学校として開始したのは、九〔1876〕年九月十八日であった」というのです（D・W・ラーネッド『回想録』p.18、p.19、p.35、同志社、1983年）。

乱暴な言葉を使ってしまうと、1875年の開校はいわばフライングのようなものと見ていますよね。

ラーネッドは、さらにハード面だけではなくソフト面でも、熊本バンドを受け入れたことで同志社はようやく学校の体裁を整えた、と理解します。

男子校が本開校した直後に、女学校（ミッションによる女子塾）が陽の目をみておりますが、こちらも当時は仮開校です。本開校は新島によって同志社に組み込まれた半年後（1877年4月）か、あるいはラーネッド流に言えば、自前の校地（旧二條邸）に自前の校舎を建てた時期（1878年。竣工は7月、始業は9月）、ということになります。

しかし、いまは仮開校で進めておきます。女学校の始まりについては諸説があって大変混乱しております。私の「判定」は、最近の拙著『同女の母』

スタークウェザー～同志社女学校の始まり～』に出しておきましたので、見ていただけたら幸いです。

## ラーネッド夫妻と女学校

女学校に関して一件だけ補足しますと、デイヴィスは別格としても、女学校の協力者としてラーネッド夫妻の働きも無視できません。この点は女学校史でも案外、見逃されていますが、京都に移住できたのは1876年4月1日のことで、借家が見つかるまでの1か月半、デイヴィス家に仮寓します。

夫妻が入京した9日後に、今度はスタークウェザーがやってきて、同じくデイヴィス家に同居します。つまり、ラーネッド夫妻はデイヴィス夫妻やスタークウェザーとひとつ屋根の下でしばらく暮らしています。単身赴任のスタークウェザーにとっては、これら2組の先輩夫妻はなんとも頼もしい存在でした。

そしてラーネッド夫妻が、借家に移って半年後に同家で始めたのが、西京第一公会です。前に触れたように、主として女学校の生徒が通いますから、日曜日にはスタークウェザーはこの教会でラーネッド牧師に協力して、彼女らに宗教指導をいたします。

そして翌年7月に女学校の新校舎が今の女子部今出川キャンパスに竣工し、10月から始業します。が、あてにしていた後任の独身宣教師が京都に入る許可が府からなかなかおりませんから、その間、しばらくラーネッド夫妻が女子寮に仮の寮務教師として、専任のスタークウェザーと共に住み込みます。

こうして見ると、初期の女子塾（京都ホーム）にとって夫妻はスタークウェザーのまことに良き同僚とも呼ぶべき存在です。彼らの繋がりには1875年にはまだなくて、1876年4月からようやく始まります。女学校から見ても、1875年と1876年との違いは、意外に大きいですね。

その後もラーネッドの貢献は続きます。最後は女子部の隣接地、今の女子大校舎（純正館）あたりに土地を買って宣教師館を建て、邸内に幼稚園（今の同志社幼稚園）やら教会（今の下鴨・洛北教会）を設立します。

夫妻の敷地は、彼らの帰国後、同志社女学校のものになりますから、ラー

ネットは在日中、一貫して女学校の内部かその周辺に住んだことになりません。

## 熊本バンドの功績

話が飛びましたから、同志社創立期に戻します。

同志社にとって重要なパーツが 1876 年に出揃ったことはお分かりいただけたと思いますので、次にはその背景に目を転じてみます。すぐに目に入るのは、人材の充実です。宣教師ではありません。生徒、学生の面でも言えます。それが熊本バンドの存在です。

とりわけ男子校の場合、熊本洋学校を卒業してきた秀才を受け入れるために新設された「バイブルクラス」(余科)の 10 数名は、言うならばすでに出上がってきた「既製品」(徳富蘇峰『三代人物史』p.511、読売新聞社、1971 年)なんです。

彼らが学校だけでなく、「同志社の教会」を組織、運営するためにも大きな力を振るったことを考えますと、彼らをめぐる熊本における 1876 年の動向は、無視できません。

その感化は男子校だけではなく、女子塾の開設にも及んでいます。後者にも実はバンドの影響が影を落としています。これも女子部史では案外に見落とされがちなんですが、さすがにいつも女学校に近かったラーネットは、慧眼です。

バンドの中には姉妹を京都に連れてきた学生がいたので、ミッションは地元在住の少数の貧しい少女の面倒を見ると同時に、バンドの姉妹たちをも共に教育する場として「女学校のはじまり」に着手したというのです(『回想録』p.32)。

具体的に言えば京都にやってきたのは、下村孝太郎、伊勢(横井)時雄、徳富蘇峰の姉妹たち(それぞれ、ちき&すえ、みや、初子)です。

もちろん彼女たちのためだけに、ミッション(具体的には J・D・デイヴィス)が女学校を創ったとは、言えません。しかし、創立の契機というか、ひとつの刺激剤になったことは確かでしょう。そのことは、女学校が開校された以後の動きを合わせて見ると、もっと鮮明になります。



バンドの人たちは、助教（有給です）として男子校で下級生を教えただけでなく、女学校にも出向いて、宣教師が教えられない科目を担当いたしました。そして3年後に男子校が最初の卒業生15人（すべて熊本バンドです）を出すと、そのうちのふたり、宮川経輝と加藤勇次郎が専任教師として女学校に赴任することになります。

初の日本人男性教師（いや、宮川などはいきなり教頭）として、外国人宣教師が手を付けられなかった学則やカリキュラムの制定などにあたり、女学校の基盤づくりに貢献しました。

同志社男女両校の骨格を創ってくれた熊本バンドの以上の功績を考えると、1月30日の有名な花岡山での祈祷会、それに続く「奉教趣意書」署名の件が社会問題となり、ついには熊本洋学校が廃校され、お雇い外国人（宣教師ではありません！）のジェーンズがクビになる、その結果、キリスト教に傾斜した彼の教え子たちが同志社にやってくるといった一連の出来事、これらは「瓢箪ひょうたんから出たコマ」といった感じです。蘇峰に言わせれば、まったくの「偶然の出来事」です（『三代人物史』p.502）。

その意味では、私たちは「旧藩中に一大恐慌」（今泉真幸『新島襄小伝』p.34、同志社校友会、1939年）を醸すことになった花岡山集会に感謝しなければなりませんね。

## 創立者並みの働き

蘇峰が言う偶然が同志社の発展にもたらした効果は絶大です。同志社が学校らしくなったのはこのバンドのおかげですから。彼はさらに、バンドの先輩たちは新島にとっては、「百万の援兵」となり、彼らの入学が「牢固ろうことして動かし難き同志社の大黒柱」を作り上げることになったと言います（『三代人物史』pp.511-512）。

たしかに、彼らがやったことは、同志社を「第二の熊本洋学校」、あるいは「京都の熊本洋学校」にしたようなものです（拙著『新島襄と建学精神』p.113、同志社大学出版部、2005年）。学外のある研究者も、同志社は熊本洋学校の「複製」（レプリカ）だと見ています（拙著『千里の志～新島襄を語る（一）～』p.75、思文閣出版、2005年）。

逆に同志社から見ると、熊本洋学校は最高級の「同志社の予備校」でもありました（『三代人物史』 p.611）。

同志社におけるバンドのメンバーたちの存在は、全校生を圧倒し、それ以前からいた生徒や学生たちの風采や言葉まで「半ば以上、熊本化してゐた」という状況が生まれます（『蘇峰自伝』 p.83、同志社社史資料室、1995年）。

この点はデイヴィスも同意見です。「同志社をして同志社たらしめるようにしたのは、彼ら〔熊本バンド〕であった」（『新島襄全集』 10、p.230、〔 〕は本井）。

デイヴィス以上にバンドの存在と働きを強調するのはラーネッドです。「自己の敷地に自己の校舎を建てた時」にちょうど熊本から活発な学生集団が来たことで、学校は「急速の進歩」を遂げることができた、だから同志社をやっと学校らしく整備してくれた彼らは、新島やミッション（デイヴィスが代表）と並んで、同志社の創立者と見なすべきだ、とさえ言っております（『回想録』 pp.9-10）。

私もこれに賛同して、「『熊本バンド』と同志社—もうひとつの創立記念日—」と題して、17年前に1876年の持つ意味を語ったことがあります（拙著『千里の志～新島襄を語る（一）～』 思文閣出版、2005年）。

さらにラーネッドは、これが1876年に起きたことはまるでミラクル、と次のようにボストンのミッション本部に報告しています。

彼らをめぐる熊本における一連の動きが、もしも1年早く起きていたら、どうだったのか。バンドの秀才が京都に来ることはありません。同志社はまだ出来ていませんから。じゃ、1年後に起きていたら？これまたバンドの入浴は考えられません。「神風連の乱」（1876年）でジェーンズは襲撃されていた可能性が高いからです（拙著『新島襄と徳富蘇峰』 p.124、晃洋書房、2002年）。

ラーネッドがこう指摘するように、熊本洋学校の廃校は、生まれたばかりの赤児同然の同志社、すなわちキリスト教に対する抵抗勢力からのイジメで失速寸前の同志社にとっては、強力な援軍を得るなんともタイムリーな（宗教的に言えば、摂理的な）出来事でした。

## 熊本バンドに関する誤解

老婆心ながら、ここで熊本バンドにまつわる「アルアル」誤解を解いておきます。

ひとつは、廃校になった熊本洋学校の学生が、全員うち揃って同志社に来たわけではありません。ジェーンズの感化を受け、彼の指導と勧めを受けてキリスト教に傾斜した在校生や卒業生たちに限定されます。その数は最終的には30数名に及びます。

さらに趣意書に署名した学生（35人）が全員、同志社に入ったわけでもありません。ところが、同志社に来た熊本バンドの人数が、奇しくも30数名前後と思われるから、両者はちょうど重なってしまい、困った誤解が生じます。

それを防ぐために、私は『蘇峰自伝』（p.65）にならって花岡山集會を契機に署名をした一群の学生を「花岡山バンド」と呼んで、同志社に来た熊本バンドとは峻別しております。

署名した学生が全員、来たわけでもありませんし、逆に署名はしていないが同志社に入学した学生（小崎弘道が典型です）がほかに何名かいるからです。

要は熊本バンドは、バンドの定義が大切なんです。『岩波キリスト教辞典』（2002年）で「熊本バンド」の項目執筆を頼まれた時、私はまず定義から入ったのですが、編集部からはもっと別の面を、と注文がついたのを思い出します。ですが、定義は大事です。それ次第で人数が変わってきますから。

3つ目の誤解は、バンドの面々は熊本から集団で京都に上ったとの誤解です。彼らは徒党を組んだり、かつての「集団就職列車」のように団体で来たわけでもありません。三々五々、やってきました。

最初に来たのは金森通倫単独で、6月入学です。9月の新学期に間に合った者は、20人台だったでしょうか。

その後もパラパラとやってきます。なかでも翌年に開成学校（現東大）を辞めてJターンした伊勢（横井）時雄や山崎ためのり為徳は有名です。同じく官立学校（東京英語学校）から転校してきた徳富蘇峰も後発組です。

彼らは東京経由で京都に来て、熊本から直行したかつての仲間と合流しま

す。全員が揃うのは1877年の半ばを過ぎた頃です（『三代人物史』p.510）。この点は、混同してはなりません。

ちなみに後発組の蘇峰は、「熊本洋学校から、学校の廃校と共に同志社に転校して来た予の先輩は数十人と言はれたが、実は十数名で、これを熊本バンドと称していた」と回想しています（徳富蘇峰『蘇翁感銘録』p.62、実雲舎、1949年）。

数10人は過大ですし、10数名は「バイブルクラス」（15人）を指すなら妥当ですが、バンドのメンバー総数を言うなら過小です。

## 一日研究会のエピローグ

結論が見えてきました。今日の発表を総括してみます。

1875年11月29日に同志社男子校が開校したこと、これは確定済の歴史的事実です。ですが、中身を検討してみると、仮開校（いわばフライング）と見ざるをえません。

本格的な開校は翌年の9月18日、今出川校地（いまだ今出川通りには接してはならず、いわば二本松校地ですが）での校舎竣工式です。この日は同時に熊本バンド（大部分の）の入学式でもありました。

翌10月の24日、今の京都御苑にあった柳原邸（デイヴィスの借家）でスタークウェザーがミッションの女子塾（Kiyoto Home）を開きます。現同志社女子部に発展する私塾の仮開校です。

そしてさらにこの翌月の11月末から12月初旬にかけて、一括すれば「同志社の教会」とでも言うべき3つの分派が、市内で発足します。

こうして9月18日から12月3日までの2か月半という短期間に、同志社（新島襄）が期待し、必要としたパーツ3つが、すべて出そろいます。こんなに密度の濃い期間は、創立146年におよぶ同志社の歴史の中でも、まずありません。

数だけでなく、中身的にも奇蹟に近い出来事がごく短期間に次々と起きました。それらはいずれも、この年の前半、1月30日の花岡山集會に始まる一連の動きに連動します。

こうした当時の消息を肌で実感していた蘇峰は、同志社にとって1876年

は特別な年だと力説します。「明治九〔1876〕年は、新島襄の生涯に於て、恐らくは最も幸運な歳の一であったと思はるる」と断じています（『三代人物史』p.508）。

ここで蘇峰が根拠としているのは、熊本バンドの入学が男子校の本開校に果たした貢献だけです。それ以外にも、彼らはこの年、女学校や教会の設立にも大きな力を発揮しているのですから、これはもう「最も幸運な歳の一つ」どころか、「最も幸運な歳」と明言すべきほどです。

先に紹介したラーネッドの見解にあるように、1876年に起きたことは、実にタイムリーというよりも、一種のミラクルです。

結論として言えるのは、新島の人生に最大級の幸運をもたらした熊本からの転校生・入学生たちが目覚ましい活躍をしたのが、1876年の秋から初冬にかけての時期でした。彼らの華々しい活躍により同志社には新たな踏切板が据えられました。

その踏切板により、初めて同志社の跳躍が始まります。それゆえ踏切板の設置は、助走のためのスタートライン（1875年）に比べても、決して見劣りはいたしません。ある意味、1875年秋の仮開校は、いわば助走の始まりでした。

参加者の皆さまの目にも、「もう一つの開校の年」として「同志社1876年」の新しい光が今日から射してくれると嬉しいですね。もしそうならば、今年のシンポジウムはひとまずハナマル、と自画自賛したいです。